多名の作者

——『リスボン航海記』の H.フィールディング——

雲　島　悦　郎

> . . . the captain's valet de chambre, head cook, house and ship steward, footman in livery and out on't, secretary, and foremast man, all burst into the cabin at once, being, indeed, all but one person. . . .(*JVL*, 265)

H. Fielding の *The Journal of a Voyage to Lisbon*（1755）は意外と解釈・評価の分かれる作品である。ひとつには，作品の中で一見対立的な諸々の力が働いており，[1] そのどれに目を向けるかによって解釈が異なってくるからだと思われる。

対立的なものとして先ず挙げられるのが作品の事実性と虚構性である。Fielding は *Amelia*（1752）を書いた後，虚構というものに不信感を抱き，[2] 事実を重視する方向に向かっており，*JVL* もその現れとする見方がある。そして，Battestin 夫妻などは，Fielding が次に手掛けようとしていた作品はポルトガルの歴史であったようにほのめかしている。[3] 確かに作品のジャンルの点から言えば，Fielding がそういう方向に向かっていると認められる。しかし，他の作品・ジャンルとの比較ではなく，旅行記として，この作品を見ると，今度はむしろ反対の虚構化の方向性に気付くはずである。そして，この作品自体の特徴について語るならば，むしろこちらの方向性に注目すべきではないかと思われる。

JVL が作者の実際の航海の経験を綴ったものだとするなら，当然，事実が語られていることになるが，しかし作者は事実より真実を強調して，真実を語るという点で，小説と同様，旅行記も歴史（“history”）だと言う。真実を語るということは，事実をありのままに語ることでは決してないのである。作者は又，“It is sufficient that every fact hath its foundation in truth . . . ”（188）と言う。[4] 作者の言う真実とは，（語られる）事実が基礎をおくようなものだから，*Joseph Andrews*（1742）や *Tom Jones*（1749）の場合同様，普遍的なものであると考えられる。そして，語られる事実がそのような真実に基づけば十分だということは，真実が語られる限り，事実はある程度，改変されても構わないということになる。そして，ここに虚構化の一つの契機があると思われる。Percy G. Adams によると，17，8 世紀の歴史家も又この普遍的真実をあらわそうとしたということである。[5]

作者は又，語られる事柄が真実であればよいというのではなく，読者を楽しませ，教化するようなものでなければならないと考える。そして，そのためには，事実は取捨選択することがまず大切で，それには分別が必要であり，作品は“man of sense”を対象として書かなければならないと言う。そして，下らない知識は好奇心という感情の対象であり，好古趣味に結び付くものとして否定される。romance が喜劇的散文叙事詩（歴史）と対置されたように，ここでは好古趣味が歴史(旅行記)と対置される。こうして好奇心が否定的に捉えられているのもこの作品の特徴である。そして，好古趣味との対照で，歴史の同時代性と有用性が強調されている点も注目すべきである。

作者は又，“ . . . a good critic will be so far from denying all kinds of ornament . . . even of circumstance . . . ”(188)と，文飾の一つとして，“ornament of . . . circumstance”も認められるという。これは要するに，事実の一部が変えることを許されるということで，これも作品の虚構化につながっていくと考えられる。そして，このようなことが作品中で

実際行われていることを作者自身が認めている箇所がある。

ある時，船長が別の船に訪問中，作者は船室で客の応対をしている。そこへ，船員の Tom が断りもなく入って来てビールのビン詰め作業を始める。作者は，制止しても言うことを聞かないので，ビンをぶっつけると威して Tom を追っ払う。この後，船長にこの件を報告に行く辺りの Tom の言動がまるで見ていたかのように具体的に語られる。ここで作者は次のように述べる。

> . . . he hastily began his narrative, and faithfully related what had happened on board our ship; we say faithfully, though from what happened it may be suspected that Tom chose to add perhaps only five or six immaterial circumstances, as is always I believe the case, and possibly done by me in relating this very story, though it happened not many hours ago. (266)

Tom は船の上で起こったことを忠実に語ったが，忠実と言っても，どうでもいいような事柄を幾つか付け加えた疑いがある。そして，同じようなことを自分もこの作品でやっている可能性があると言うのである。この点に関連し，Glenn W. Hatfield は小説の登場人物が自分のことを語る場合の主観性と同じで，ここでも人間性に関するそのような真実を作者が表わそうとしていると見る。[6] 又，Wilber Cross は，作者が読者を楽しませるために，虚構で事実を膨らませていると言う。[7] しかし，作者が虚構化するのは，単に話を面白くしたりするためだけではないと思われる。例えば，ワイト島の居酒屋に食事をしに行った時，そこの女将が掃除をしたばかりで，食事をするところが濡れていたので，作者の病には良くないと気遣った作者の細君が，母屋の裏に納屋を見付け，そこで食事を済ますことに作品の中ではなっているが，実は納屋さえもなく，作者の作り話だという説もある。[8] どちらの言い分が正しいのか結局分からないが，考えられるのは，それまで作者は高貴なものの良さを強調してきたので，今度は

ここで質素で素朴なものの良さを示すとともに，自分もそれが分かる人間だということを示す必要性(読者の信頼を得るための修辞上の)を感じたために，ある程度，話を脚色している可能性があるということである。Mrs Francis という人物の描写も，*JA* 中の人物，Mrs Tow-wouse のような，客に不親切で亭主を尻に敷く宿屋又は飲食店の女将の典型を登場させるために，或る程度虚構化がなされていると考えられる。

作者は自分の人間観・世界観・価値観といったものを，この短い作品の中にも，なるべく広範にバランスよく取り込もうとしており，そのためにも虚構が必要になったと思われる。この場合，長い小説の場合と比較すると，主題等を絞ろうとしているように見えるかもしれないが，短い旅行記であることを考えると，むしろ少しでも多くのことをバランスよく取り入れようとしていると言える。実際，この作品には，モチーフ等の点で，Fielding の作品の世界の道具だてがすっかり揃っているように見える。

このように，この作品は，先ずその世界が実録性と虚構性の二重性を有していると言える。[9] 又，この作品では普遍的真実が基盤になると言っても，時代性や地域性が軽視される訳ではなく，むしろ同時代の英国の海に関する事情が重視されているが，この普遍性と時事性も作品の一種の二重性と言えるかもしれない。作者が主に目を向けるのは過去ではなく同時代である。そして，単に同時代というだけではなく，それが書かれたのと丁度同じ時期のことが大きく取り上げられている。トピカルな事柄が作品の前面に出て，むしろ普遍的な事柄（“goodness” を扱った部分など）は背景に退く。伝えられる事柄は単に読者の好奇心を満たすようなものではなく，社会にとって有用で，公（的利）益をもたらすようなものであるとされている。そして，その公的な事柄の中心に商業に関することがある。

この旅行記でも，喜劇的散文叙事詩の場合同様，次のような表現に見られるように，作者はジャンルとか規則にこだわって見せる。

I shall lay down only one general rule . . . (184)

> . . . not to trouble the reader with anecdotes, contrary to my own rule laid down in my preface, I assure him I thought my family was very slenderly provided for . . . (194)

規則や形にこだわって作品の世界を構築することは当然，作品をartとして意識しているということである。この作品は，そのようにして(形)作られたものであり，それ故，実際の事実から離れ，虚構に近付き，それにつれ，同じ作者の他の虚構作品と類似性が顕著に認められるようになる。

この作品の作者に実際の作者のありのままの姿を認めるような読み方は今では主流ではないと思われる。[10] しかし，先に述べたような二重性のため，この作品の作者は，別の統一的人格としても簡単に捉え切れない面が出てくる。この作品の場合，「作品の外の作者」に対する「作品の中の作者」というような存在を考えても，言葉の矛盾になることを承知の上で言えば，これは作品の実録性の故でもあろうが，作品の外の歴史的作者がそのまま作品に顔を出しているように感じられる時がある。又，個々の作品の作者は全て異なるという前提を立てても，作品を読むうちに，別の作品でもおなじみの顔が覗いているように思われたりするところもある。

この作品には，実際の作者についての単なる歴史的（伝記的）事実が，そのまま語られていると感じられるところや，自らに“monitor”という公的な任務を課して，世間の実情を伝え，己の意見を述べるだけではなく，更に作者が自らに役割を課して無意識に演技しているのか，それとも作者が後で自分の行動を脚色して描いているのかと思わせるところがある。そのいずれにせよ，作者が自分達は上流人とは言えなくとも，紳士淑女であることは間違いないと信じ，妻の元の低い身分のせいもあって，無礼な扱いに余計むきになって憤ったりする時，いつか小説の登場人物のように思えてくることもある。

これは，作家の面として見ると，旅行作家，政治パンフレット作家，ジャーナリスト，風刺作家，物語作家などとしての側面であり，そういう

異なったジャンルの作者が一つの作品に一人の人物として現れてくるとも言える。[11] それは丁度，例の Tom が船上で幾つかの役を兼ねており，そのため作者によって "polyonymous officer" (266) と呼ばれるように，作者も幾つかの役を兼ねているとも言えよう。そして，全てを統一的に捉えようとすると一見矛盾するような表現等も，それぞれの場で，作者の異なった側面が表れていると考えれば，もっと自然に理解できるように思われる。

作者のこれらの側面の中で，この作品で最も正面にあらわれているのが，"monitor" として，法の改正を当局に促す面だと考えられる。社会的階級が上で，それ故，責任上，知らなければならない立場であるにもかかわらず，その階級故に何も知らない者に対して，必要な情報を与え，何かについて提言し，説得するのが作者が自らに課す "monitor" の役割で，その相手である上流人が読者の中心的位置を占める。そして，この相手を説得するという点でレトリックが重要な意味を持つ。しかし，説得の内容である公的問題に関する限りでは，他の読者も等しく理解を求められていると考えられる。

作者は先ず読者を一般の読者と特定の読者層(上流人)に大別する。そして，作者が問題にすることに関し，一番無知だと考えられるような者が，作者にとって主要な読者である。それは上流人 ("men of fashion") であり —— "the very best of our readers" とも呼ばれるが，"best" は単に階級的な意味で，良質とか善良の意味はない ——，一般の人(一般の読者)には当たり前のことでも上流人は知らないことが多い。そして，この場合，海に関することが中心で，海のことを良く知らない者 ("fresh-water reader") が主な対象である。そこで，上流人ではなく，乗客として世間を旅せざるを得ない身分で，それ故に旅で問題になる下々のことを良く知る作者が，権力者，特に法律を改正する権限のある立法府の者に，"monitor" として情報を与えると共に，対策を進言する役割を引き受ける。

作者が旅の途中で特に問題にするのが商取引における泥棒まがいの行為

(詐取)である。それが野放しになっているのは立法府の看過(見落とし)が原因であると言う。権力者の腐敗も怖いが無知も怖い。そして，この作品では権力者の腐敗よりも，むしろ彼らの無知・無理解の方が問題になっている。政治家の無知は問題でも，彼らの腐敗堕落は *A Proposal for Making an Effectual Provision for the Poor* (1753) の場合同様，一応度外視されている点が，*Jonathan Wild* (1743) などと明らかに違う。しかし，度外視されているということは作品の外の作者がそれに批判的ではないということでは決してない。作者は次のように述べる。

> If what I have here said should seem of sufficient consequence to engage the attention of any man in power, and should thus be the means of applying any remedy to the most inveterate evils, at least, I have obtained my whole desire. . . I would, indeed, have this work—which, if I should live to finish it, a matter of no great certainty, if indeed of any great hope to me, will be probably the last I shall ever undertake—to produce some better end than the mere diversion of the reader. (261)

作者は，権力者の注意を引いて，社会の根深い悪弊を正す手立てになれれば本望どころか，望みの全てであると言う。そして，この“whole desire”という言葉は，この作品の意図・目的を考えるうえで注目すべき表現である。

Fielding は *A Proposal for Making an Effectual Provision for the Poor* の中で，これを書いたのは，自分の家族がこの案の対象，即ち貧乏人にならないように家族の生活の備えをする気持ちはあるが，野心や金銭に対する強欲のためなどでは決してないと述べている。[12] 家族や自分の生活のために作品を書くことは，作者にとっては以前から当たり前のことになっており，恥ずべきことでもなければ，作品自体の狙いと取り立てて言う程のことでもないはずである。William J. Burling は家族のために

年金を貰うのが作品の大きな狙いだったと主張するが,[13] 年金も家族が生活にこまらないようにと考えてのことだから，やはり同じことである。

目的と言っても，作品の外の実在の作者の私的事情と絡んだ執筆動機のようなものと，作品自体の「情報を与え，そして楽しませる」というような目的は区別すべきである。ただ，この作品では前者の部分が作品に入って来がちなために，作品の大きな目的と取られてしまうようだ。これは又，この本が売れることにより，残された家族が助かることを期待した内容の編集者による "Dedication to the Public" のせいもあるかもしれない。

作者は，現行の法の十全な執行が大切だという考え方から，法には不備があり改正が必要だという考えに変わってきたと言われる。[14] そして，この作品では海事関係法の改正を訴える。法は力ということもあろうが，"power" という語が，権力・権威・権限とか，力・能力という意味や，更には権利まで含むように使われている。そして，その "power" の濫用の代表として 暴虐（"tyranny"）と放縦（"licentiousness"）が考えられている。

> By liberty, however, I apprehend, is commonly understood the power of doing what we please; not absolutely, for then it would be inconsistent with law, by whose control the liberty of the freest people . . . must always be restrained. (239)

自由とはしたいことをする "power" ではあるが，それは絶対的なものではなく，法によって抑制されなければならない（何事に関しても絶対性が否定される）。しかし，自由は放縦と誤解されている。そして絶対的な自由を有するのは最も低い階級の者であり，そして，自由という言葉の曖昧な使用が諸々の問題を生み出していると言う。そこで権力者の注意をこれに向け，法の力によって解決しなければならない。目的が達成できるがどうかはともかく，手段は常に講じられるものである（"Means are always in our power; ends are very seldom so." [263]）と主張する。[15]

例えば，治安判事は法を執行する権限を十分に持っていないので，そういう権限を与えることが肝要である。そのような権限を正しく行使すれば，貧しき者たちを有用な社会人とすることができ，それにより商業を発達させることが可能である。ところが，低劣な精神及び能力の持主に与えられる権力ほど始末に負えないものはない。職務権限を笠に着て威張る小役人や，水先案内人，そして駅馬車の御者さえも一種の暴君になる。*JW* の場合と比較すると，この暴君は矮小（卑小）化されているので，“petty”という形容詞がふさわしい。作者は次のようにも言う。

> A tyrant, a trickster, and a bully, generally wear the marks of their several dispositions in their countenances; so do the vixen, the shrew, the scold, and all other females of the like kind. (236)

“vixen”，“shrew”，“scold”は“tyrant”に相当する。そして，Mrs Francis は，女性版の“tyrant”の典型として描くために，ある程度の虚構化が行われたと考えられる。そして，法外な勘定を請求する彼女は盗っ人の面も兼ね備えていることになる。*JW* では同じ“great man”ということで，征服者・暴君（文字どおりの）・政治家が泥棒と並べられて攻撃の対象になっているのに対し，*JVL* では“mob”が泥棒になぞらえられ，それよりもやや上の階層の権力の濫用者が“tyrant”として攻撃の対象となっている。そして，社会の最上層部の者（権力者）などは，この作品では批判の埒外におかれている。しかし，それは，作品の外の作者が権力者に対し批判的であるかどうかとは別の問題である。

Fielding は *A Proposal for Making an Effectual Provision for the Poor* の中で，貧しい者の苦しみは，彼らの犯罪ほど注目されないが，それは犯罪ほど知られていないからで，それ故に同情の念とともに口にされることは滅多にない。彼らは彼らの世界の内部で苦しみ，その外部で犯罪を犯すからだ，という趣旨のことを述べる。[16] そこには，罪を犯す貧しい

者に対する作者の同情の念が認められるが，*JVL* では「盗」のひどさの実態を知らせ，法の改正を促す必要があるために，盗む者に対する作者の同情の念が現れにくいと考えられる。そして，魚の値段を吊り上げて暴利を貪るロンドンの魚商人達は縛り首にすべきだと作者が息巻く時，この商人たちが大泥棒の Wild などと重なってくる。*JVL* では最下層の者は mob という第四階級に代表される形になり，彼ら無法者（盗人）は法で取り締まらなければならない存在である。大砲の音にも怯まなかった Veal 船長さえも，法という言葉のほんのかすかな響きにも恐れ戦くのである。

作者の上記のような態度は，作者の下層階級に対する二面性として指摘されることもある。Battestin 夫妻は，Fielding は下層階級一般の場合は厳しいが，個別的・具体的場合には寛大な傾向があると言う。[17] 別の見方をすれば，これは彼の取り締まる立場と裁く立場の違いが出ているのかもしれない。更に，作者の公的な顔と私的な顔の隔たりもあり，*JVL* には元治安判事の顔から，作家としての種々の顔，そして，父親・夫としての顔に至るまで，さまざまの顔が出てくるように思われる。

作者が妻や子に示す愛情という形で，家族愛も問題になっていない訳ではないが，公的な事柄として，公益を守る必要性を訴えることがこの作品では中心になっている。愛国心とか愛国主義者という言葉は Fielding の世界ではむしろ ironical な意味で用いられた印象があるが，この作品ではまともな良い意味で用いられ，強調されている。

> . . . lest the reader should be too eager to catch at the word *vanity* . . . I . . . will frankly own that I had a stronger motive than the love of the public to push me on: I will therefore confess to him that my private affairs at the beginning of the winter had but a gloomy aspect. (193)

> I rejoiced, therefore, greatly in seeing an opportunity . . . of gaining such merit in the eye of the public, that, if my life were

> the sacrifice to it, my friends might think they did a popular act in putting my family at least beyond the reach of necessity . . . though I disclaim all pretence to that Spartan or Roman patriotism which loved the public so well that it was always ready to become a voluntary sacrifice to the public good, I do solemnly declare I have that love for my family. (194)

作者がここで，愛国心よりも家族愛を重視すると言うのは嘘ではないが，読者の信頼を得るためという意味で，多分に修辞的であり，この言葉ゆえに，家族のために年金を得るのがこの作品の大きな目的であったと主張するのは問題がある。作者は，人間の自然の情を捨ててまで大義のために尽くすような極端な姿勢は肯定しなかったし，スパルタ人やローマ人の愛国心もそのような例として出されていると考えられる。物事を誇大視したり，美化したりせずに，実物大に有りのままに捉えようとする作者は，作品制作の動機という点では家族愛がより強く働いているということを認めているが，私的な事柄は作品において最も背景的であり，これと作品の狙い（目的）は自ずと別である。

又，次のような一節もある。

> To say the truth, the public never act more wisely than when they act most liberally in the distribution of their rewards; and here the good they receive is often more to be considered than the motive from which they receive it. Example alone is the end of all public punishments and rewards. Laws never inflict disgrace in resentment, nor confer honour from gratitude. (195)

何か目的を達成して，公共の利益をもたらす者には，行動の動機よりも，それがもたらした利益を先に考えて，国は存分に報いるのが賢明だとも言うから，動機はむしろ軽視されている。公的な賞罰は手本または見せしめを考えて行うべきであり，法の執行は感情に左右されず冷厳でなければな

らないと言う時は，元治安判事としての考えも出ていると思われる。

> ... I have scattered my several remarks through this voyage, sufficiently satisfied in having finished my life, as I have probably lost it, in the service of my country, from the best of motives, though it should be attended with the worst of success. (263)

この引用文の中の "best of motives" の意味は曖昧だが，作者にとって愛国心よりも強い家族愛のことと考えられる。とすると，家族に国から年金が下りるのは，むしろ望み薄だと思っていることになる。(反対に，愛国心と取れば，法律の改正は無理だと思っていることになるが，そんなことはないはずである。)

この作品では，*JA* や *TJ* などの小説の場合とは反対の価値が認められているように見える。ostentation は affectation に近いものと考えられるから，むしろ否定的に捉えられるはずなのに，国威を示す観点から肯定的に捉えられる。同様に，"great" なものや，"magnificent" で "noble" なものが賞揚され，反対に小さいものには嫌悪感が示される。この作品では "great" なものが "good" であるという論法は表に出てくるが，"good" なものこそ本当は "great" ではないかという *JW* に見られたような論理は出てこない。この点との関連で次に作品における irony について考えてみる。

作者は Colley Cibber について次のように言う。

> ... a man must not only have been void of all taste of humour, and insensible of mirth, but duller than Cibber ... (261)

明らかに，Cibber に対する作者の態度は従来と変わらない。

Richardson に関しては次のように述べる。

> I answer, with the great man [Mr. Richardson] whom I just quoted, that my purpose is to convey instruction in the vehicle of entertainment; and so to bring about at once . . . a perfect reformation of the laws relating to our maritime affairs: an undertaking, I will not say more modest, but surely more feasible, than that of reforming a whole people, by making use of a vehicular story, to wheel in among them worse manners than their own. (189)

Richardson についても，やはり他の作品同様，批判的であり，ここの "great man" は irony に他ならないとするのが普通の見方だろう。そして，ここら辺りの作者には以前の作品の作者と共通性が認められる。では，次の一節はどうであろうか。

> . . . had my great patron been convinced of an error, which I have heard him utter more than once, he could not say that the acting as a principal justice of peace in Westminster was on all accounts very desirable, but that all the world knew it was a very lucrative office. . . . lest the case between me and the reader should be the same in both instances as it was between me and the great man, I will not add another word on the subject. (194)

この中の "great patron" というのは Duke of Bedford のことだと理解されている。[18] そして，治安判事の仕事は実入りが良いという発言が示す Bedford の無理解に対する作者の不満は認められなくはないが，"the great patron" とか "the great man" という表現自体には irony は感じられないように思う。Battestin 夫妻は 1749 年の Westminster の選挙と Fielding の関わりを論じて，作者が上の引用文の直ぐ前の箇所で政府から年金を貰っていた事実を明らかにするのは，Duke of Bedford に感謝の

意を表すためだと言う。[19] しかし，同夫妻の *Henry Fielding: A Life* では "the great patron" とは Duke of Newcastle のことを指し，この呼び方には少し irony があると言う。[20]

作者に強盗鎮圧の妙案を求めて作者を呼び出しながら，待たせたうえに結局会わなかった Duke of Newcastle への言及は，その非礼を作者が批判しているとする批評家が結構多い。[21] そして，当時でも，この作品の編集者はそう感じたらしく，この作品の所謂 shorter version (Humphrys version) では，そのように受け取られないように手が加えられている。しかし，忙しい政治家にとって，このように人を待たせるのは珍しいことではなく，だから作者は非礼を批判している訳でもないという見方もある。権力者に提言を採用してもらおうと思う者が，よりによって，時の権力者を批判するはずがないとも考えられる。William J. Burling は家族のために年金を貰うのが，作品の大きな狙いであったとする立場から，作者が Duke of Newcastle に批判的だという見方は当たらないと言っている。[22]

最後に，Robert Walpole に関する "one of the best of men and of ministers" (247) という表現について考えてみる。これは，そのままの意味を表していると取る立場と ironical な表現だと取る立場に別れる。[23] 例えば，Austin Doson は，"Here he returns to his first, and probably more genuine attitude of admiration." と言い，F. Holmes Dudden は " . . . Fielding, with the passing of years, had learned to appreciate the great qualities of the minister . . . and a sort of recantation, deliberately inserted this passing tribute to his memory." と言い，前者の立場に立つが，W. L. Cross は "Fielding always regarded Walpole as the head of a body of plunderers who deceived the people by shows like the one at Spithead every year." と言い，後者の立場に立つ。Douglas Brooks は "The reference to him as "one of the best of men" is doubtless ironic." と言うから，"one of the best of men" の部分は irony だが，"one of the best of ministers" の部分はそうでもないと感じ

たのかもしれない。しかし，いずれも，歴史的作者（作品の外の実際の作者）と作品の作者を区別せずに，結局，歴史的作者の言葉として理解しようとする。しかし，この一節を文脈の中で考えると，この言葉は“monitor”としての作者の言葉であり，この“monitor”は，既に見て来たように，Crossの言い分とは逆で，Walpoleによる恒例のSpitheadの艦隊のショーのようなスケールの大きなものはむしろ国威を示すという理由などで称揚する立場にある。又，既に亡くなった者が相手とはいえ，権力者の批判は“monitor”の領分外であるし，ここで権力者批判をするのはレトリックの点からいっても得策ではないように思われる。しかし，この言葉をirony と取らず，むしろ賛辞と取るにしても，あくまでも“monitor”が問題にしている事柄の範囲内のことであるし，それに，この“monitor”の言葉の場合は“best”には道徳的意味は薄いから，Fieldingの世界ではたいした誉め言葉とも言えないように思われる。“good”が道徳的な意味で用いられるのは，この作品の物語的部分においてであり，それは作品において背景的である。又，Walpoleに対する先程の言葉が歴史的作者のWalpoleに対する見方そのものを表わしているとは必ずしも言えない。[24)]

作品のある箇所には，作者が演ずる役の一つしか出ないとすれば，以上のようなことが言えると思うが，一つの作品の中に色々な役割の作者が出るように，作品の一節や一句にも，強弱の差はあれ，作者の色々な面が出るとしたら——そして，この作品ではその可能性がないとは言えない——，Walpoleに関する上の言葉にも多少のironyが読み取れるかもしれない。

［注］

※　本稿は，日本ジョンソン協会第28回大会（1995年5月，於 専修大学）のパネル・ディスカッション「旅行記から何が見えるか」で，「『リスボン航海記』の虚構性などについて」と題して口頭発表した時の原稿に多少手を加えたものである。そして，この発表は又，以前発表した拙稿「公憤の旅人」（上・下）（『下関市立大学論集』第26巻第2号・第27巻第1号）を土台にしている。そのため，本稿と「公憤の旅人」は重複するところがかなりあるが，以前とは

異なった視点も取り入れているので，敢えてこういう形で発表することにした。

1）Melinda Alliker Rabb, "Confinement and Entrapment in Henry Fielding's *Journal of a Voyage to Lisbon,*" *Reader Entrapment in Eighteenth Century Literature*, ed. Carl R. Kropf (New York: AMS Press, 1992), 234, 235, 239, 251.

この他に，*JVL* を中心的に扱った論文としては次のようなものを参考にした。

Albert J. Rivero, "Figurations of the Dying: Reading Fielding's *The Journal of a Voyage to Lisbon,*" *JEGP*, 93(1994), 520-533; William J. Burling, "Merit Infinitely Short of Service: Fielding's Pleas in the *Journal of a Voyage to Lisbon,*" *ES*, 70(1989), 53-62; Leland E. Warren, "This Intrepid and Gallant Spirit: Henry Fielding's Sentimental Satiric Voyage," *ELWIU*, 9 (1982), 43-54; Hugh Amory, "Fielding's Lisbon Letters," *HLQ*, 35(1971/2), 65-83; Arlene Wilner, "History as Private Perspective: Fielding's *Journal of a Voyage to Lisbon,*" from *MLS*, 10(1980), *Henry Fielding*, ed. Harold Bloom (New York, New Haven and Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1987), 193-204 ; Terence Bowers, " Tropes of Nationhood: Body, Body Politic, and Nation-State in Fielding's *Journal of a Voyage to Lisbon,*" *ELH*, 62(1995), 575-602.

2）"[he would] hold no further Correspondence with the gayer Muses." (*The Covent-Garden Jrnl*, II, 142)

3）Martin C. Battestin and Ruthe R. Battestin, *Henry Fielding: A Life* (London and New York: Routledge, 1989), 601.

4）本論の作品からの引用は次のテキストによる。なお，作品名は原則として二度目からは *JVL* などと略記する。

Henry Fielding, *Jonathan Wild* and *The Journal of a Voyage to Lisbon* (New York: Everyman's Library, 1968) ; Henry Fielding, *A Proposal for Making an Effectual Provision for the Poor*, in *An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers and Related Writings* (Oxford: Clarendon Press, 1988).

5）Percy G. Adams, *Travel Literature and the Evolution of the Novel* (Lexington: The University Press of Kentucky, 1983), 31.

6) Glenn W. Hatfield, *Henry Fielding and the Language of Irony* (Chicago: The University of Chicago Press, 1968), 149, 211.

7) Wilbur L. Cross, *The History of Henry Fielding* (New York: Russell and Russell, 1963), 61.

8) Ronald Paulson and Thomas Lockwood, *Henry Fielding: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1969), 391-92.

9) 坂部恵『ペルソナの詩学』岩波書店 1989 で使われている「二重性」とか「多重性」という言葉を本論では自己流に利用している。<語り> が <騙り> や<形>と語源的につながるとか, <語り>が<よそおい>や <ふるまい> と関係があるという同書の指摘は, *JVL* を読むうえでも非常に参考になった。

10) F. Homes Dudden がこのような読み方を典型的に示している。"... the real Fielding, a very truth of his nature and character..." (F. Homes Dudden, *Henry Fielding: His Life, Works, and Times* [Hamden: Archon Books, 1966], 1040).

これに対し, 例えば, Warren は "... none of the various examples of Fielding as author we encounter is necessarily the true Fielding." と言う。Warren, 46.

11) "a work of contending genres", "the *Journal* conflates travelogue, diary, novel, autobiography, and essay," (Rabb, 232); "Fielding's unique fusion of the techniques of autobiography, travelogue, socio-political commentary and imaginative fiction" (Wilner, 193).

12) *A Proposal*, 277.

13) Burling, 53-62.

14) Pat Rogers, *Henry Fielding: A Biography* (New York: Charles Scribner's Sons), 206.

15) shorter version では "Ends are always in our power; Means are very seldom so." となっている。

16) *A Proposal*, 230-31.

17) Battestin, *Henry Fielding: A Life*, 551, 567-568.

18) Austin Dobson, Henley edition of *JVL*, Vol. XVI, 190, n.; Brooks, Everyman's Library edition of *JVL*, 194, n.

19) Martin C. Battestin and Ruthe R. Battestin, "Fielding, Bedford, and the Westminster Election of 1749," *ECS*, 11(1978), 143-85.

20) Battestin, 460.

21) 最も新しいところでは Bowers がこの立場。Bowers, 595.

22) Burling, 53.

23) Dobson, Henley edition of *JVL*, Vol. XVI, 298, n.; Dudden, 1015; Cross, Vol. III, 63; Brooks, Everyman's Library edition of *JVL*, 303, n.

これ以外に，irony でないと取るのは Thomas R. Cleary, *Henry Fielding: Political Writer* (Waterloo: Wilfrid Laurier University Press, 1984), 301; Richard J. Dircks, *Henry Fielding* (Boston: Twayne Publishers, 1983), 121; R.C. Jarvis, "The Death of Walpole: Henry Fielding and a Forgotten Cause Célèbre," *MLR*, 41(1946), 113-30; Brian McCrea, *Henry Fielding and the Politics of Mid-Eighteenth-Century England* (Athens: University of Georgia Press, 1981), 196; Battestin, *Henry Fielding: A Life*, 589 と多い。

これに対し，irony と取るのは他に G. M. Godden, *Henry Fielding: A Memoir* (London: Sampson Low, Marston & Co., 1910), 294 ぐらいである。

24) Fielding の Walpole に対する態度は一貫したものではなかったという見方が有力である。See Bertrand A Goldgar, *Walpole and Wits: The Relation of Politics to Literature, 1722-1742* (Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1976), 98-115, 150-162, 189-208.